

教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1993 発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

宣教する教会

〔教皇様は、回勅「救い主の使命」についてお話しになった。〕

1 (….) キリストが教会に託された宣教の命令が、永遠に、従って現代でも有効であることを、今回の回勅は確認しています。宣教は福音の道に仕える人全てにとつて避けられない義務となっています。また、西暦二千年代に入るに当り、今日ではより一層、全キリスト教世界の献身が求められています。歴史上のどの時期にもあったことですが、教会は復活したキリストが託された宣教の使命に直面しており、私たちの時代にも、キリストを知らせる熱望が薄れてはなりません。むしろ力も新たに、主の御言葉への新たな信頼をもって宣教活動を押し進めなければならぬのです。

現代の世界は、昨日も今日も、

緊急にキリストを必要としていますが、それは真理と正義の道、連帯と平和の道を再発見するためなのです。

回勅は宣教活動への努力を訴えるだけではなく、福音宣教のために働こうとする人々への手引きとなるように、信仰上の諸確信を新たに、深く掘り下げて考察するよう呼びかけています。そこで、神の福音宣教義務を基礎づけ、活性化することのできる神学の教えを考察することが何よりも有益です。今日、教会の宣教活動を暖昧にしたり弱めたりするような、いくつかの教説が広まっています。が、そういう説に内在する危険を神学の光に照らして見分けることもできるのです。私が切に願うのは、神学者の皆さんが宣教のいろいろな局面についてもっと深く研

究し、説明して、疑問の点や曖昧な箇所が一掃され、適切な説明が見いだされることです。従って、次々に新しい問題が出てきても、これを否定したり拒絶したりして逃げを打つことがないように、ということなのです。(….)

三位一体の信仰

2 「救い主の使命」の教説は皆さんもすでによくご存じですし、教会の発意がすべて、イエズス・キリスト、唯一の救い主、諸国民への光、見えない神の姿として御父から遣わされた御方への信仰に基づいているという事実を自覚しておられます。聖霊はキリストによってこの世に遣わされました。さて、この三位一体の信仰から生じてくるのが、神の国の到来を説き、全ての被造物を神のもとへ導き戻そうとする願望と祈りです。教会は父と子と聖霊の一致のうちに一つに集められた民であることをはっきり自覚していますし(教会憲章、4番参照)、真実の神についての啓示をあらゆる人に宣言して、これを知る人に救い

がもたらされるようにしなければならぬことも、自覚しています。神はこのように自らを私たちに啓示され、この三位一体の経綸から私たちに関する救いの計画を知ることができのですが、その計画こそは、神が自らを人間と分かち合い給う自由で無償の行為に、私たちの奉仕を結び付けるものなのです。三位一体信仰の告白は、キリストと聖霊についての真実の知識及びその信仰告白と切り離すことができません。キリストのみわざと聖霊の賜は三位一体の神秘に刻み込まれ、救いの歴史の中で啓示され、伝えられています。

3 三位一体の秘義から、宣教に関するキリスト論的基礎の意味が理解できます。イエズス・キリストは御父のみことばであり、人となり給うたがゆえに、唯一の普遍的な救い主であることを認め、初めに、人間は神との霊的な交わりに入ることができ、聖霊の御働きの下にそれができます。この独自で普遍的な仲介は、神に至る道の妨げとなるどころか、神御自身がお造りになった唯一の道なのです。キリストはこのことをよく承知しておられました。キリストだけが、「神の決定的な自啓示」だからです。(「救い主の使命」5番参照)

ご承知の通り、回勅はいろいろの段階で、キリストが行われ、言われたこととその御国の到来との間の密接な関連を、繰り返し強調

しています。他方イエズスの独自性は、イエズスが「アッパ、父よ」と呼びかけられる神との独特な関係にあります。(マルコ14・36)

さらに、イエズスの神秘は復活の光によって十分明らかになります。御受難と十字架は最初つまづきとなりましたが、弟子たちの心を開いて聖書を悟らせ(ルカ24・32-45参照)、普遍的な贖いと神の終末論的な主権の成就が意味するものを啓示するのです。フィリッピへの手紙に見られるキリスト論的な賛歌は、贖い主キリストの生涯を見事に描いています。キリストは本性として神であったが、かえって奴隷の姿をとり、十字架に死ぬまで自分を卑しくして従われた。そこで神は彼を称揚し、全ての名に優る名をお与えになった。

このユニークさによってキリストには絶対的・普遍的な意義があり、歴史に属しながら、歴史の中心かつ目的であり続けるのです。

〔「救い主の使命」6番参照〕

福音宣教に与えられた人は誰でも、イエズスの神秘のこれらの局面と要素をつねに心得て、それらの間に対立や分裂を見ないようにすべきです。さもなければ、教会が説くキリストへの真実の信仰は曖昧になり、危険に陥ることになります。キリスト論の研究方法が昔と今とで異なっているからと言って、イエズスの独自性を曲げてはなりません。もちろん、キリストの神秘のいろいろな局面について評価し、理解を深めることは許されま

すし、有益ではありませんが、キリストの一体性を見失ってはなりません。まことに、キリストは御自身について十分に自覚しておられることを証明し、「子は目に見えぬ神の姿であつて、全ての被造物の長子である」(コロサイ1・15)ことを「行いにおいても、言葉においても」(ルカ24・19)明らかにしておられます。

4 そこで、その理由は明らかですが、真のキリスト信仰に関して、宣教活動の全てにマイナスとなる恐れのあるような、あの種の偏向には注意を促さなければなりません。

今日考えようとするキリスト者の祈りは、旧約聖書に起源を持つものです。神が秘義を示すためお選びになった民の宗教的経験と深く関わっています。

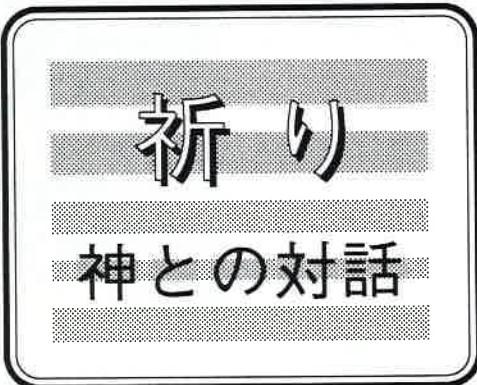
異教の民々とは対照的に、敬虔なイスラエル民族は「神の御顔」を知っており、シナイ山で結ばれた契約の名のもとに信頼をもって神に近づくことができました。イスラエルにおいてはヤーウエが万物の造り主、人間の運命をつかさどる者、最も驚くべきことをなした御方として祈りを捧げられていました。しかし何よりもまず、ヤーウエは契約の神でした。いつ、どこでも人々が信頼を込めてヤーウエに祈ったのは、こうした自覚によるものでした。「主よ、力よ、私はあなたを愛する。」敬虔なヘブライ人たちは、詩篇作者と声を合せて「主は私の岩、砦、私の逃

げななりません。

キリスト教信仰と他の諸宗教との関係についての、広範な分野にわたる精密な研究も、啓示に忠実であつてのみ意義があり、展望があるのです。問題が目に見えて先鋭化するのはいづれも、キリストの教えや生き方を、福音の影響のない社会や伝統に植えつけようという課題に直面する場合です。この任務は困難で長期にわたるものと思われまふ。キリストへの信仰を指して行われる諸文化との出会いと対話も、もしそれが普通の教会とそのカトリックの伝統との十

信頼と、加えて深い崇拜、尊敬の念。実際、神はご自分の方から契約を結ばれました。従つて、神の御前で祈る人のとるべき態度は、まず耳を傾けて聞くことです。イスラエル人の毎日の信仰宣言は、まさしく「聞け」という言葉で始まっているではありませんか。「イスラエルよ聞け、われらの神なる主こそ唯一の主である。」(第二法の書6・4)

律法の第一の掟が唯一の神を礼



分な霊的交わりによつて実現されなければ、無益となりましょう。最初の数世紀に開かれた、キリストを論じた偉大な公会議で宣言されたことを、退けたり無視したりすることは、実際に時々見られることですが、決して許されるべきではありません。教会の信仰として宣言されたことは、何事であれ永久にその通りであり、消し去ることはできないのです。

これに関して、回勅「救い主の使命」は、「神のみことばとイエズス・キリストとは別々のものだと考えること」(6番)や、神の国を拝することであるのは偶然ではありません。他のあらゆる道徳義務がこの掟から発しています。正義と聖性そのものである神が封印された契約に對しては、この至高の相手にふさわしい態度で守り行う必要があります。道徳的に正しい生活を送ることにまさる祈りはありません。かつてイエズスも、ホ

ゼアの書の特に興味深い一節を引いて、フアリサイ人たちにこのことを思い起させました。「私が望

をキリストの国から切り離すことがないようにと警告しています。イエズスは地上で天の国を開始されました。(教会憲章、3番参照)この王国は「自由に解釈できる概念、教説、プログラムのようなものではなく、何よりもまず、ナザレトのイエズスという顔と名前を持った一個の人格であり、見えぬ神のうつし」です。(救い主の使命) 18番) 同じことが、キリストの神性を明白に認めない人々、キリストにおける神の啓示を他の諸宗教の著作や伝統と同一のレベルに置く人々についても申せましょ

むのは、いけにえでなく愛なのだから。燔祭ではなく、神を知ることなのだから。」(ホゼア6・6)

敬虔なユダヤ人の祈りは、契約の神との出会いの場です。すから、異邦人のように物言わず、聞こえもしない偶像を相手の独り言とは違います。祈りは神との現実の、真の対話であり、神は昔から言葉と行いをもって幾度もご自身を示し、現在もいろいろな方法で、ご自身の救いの現存をお知らせになります。

それはまた、すこぶる共同体的な意味合いをもった祈りです。祈る人は、神から選ばれた民の一員であるがゆえに神と話すことができると感じています。それでは個人としての立場が消えるわけでもありません。祈りの手引きとも言うべき詩篇に目を通すだけで、

う。キリストの本質の全てを認めようとしなないある種の神中心主義は、カトリックの信仰には受け入れがたいものです。

キリストとキリストの言葉を受け入れることが難しいからと言つて、恐れてはなりません。いつでもどこでも、全ての人、全ての国民と生ける神との出会いを準備された聖霊の御働きは、今日もお、諸文化、諸宗教に属する人間の心の中で続いているのです。(九二・四・十一) ※「救い主の使命」邦訳が中央協議会から出ています。

個々のイスラエル人のあつた敬神の念を見て取ることができません。

預言者たちもこうした敬虔さを人々に強く勧めています。繰り返してやってくる形式第一主義の誘惑や、失望落胆と信頼喪失の状態の中で、預言者たちは常にもつと霊的な、内なる信仰へとイスラエルを引き戻そうと努めてきました。そのような信仰のみが、ヤーウエとの真の交流を実現させるからです。

こうして旧約の祈りが完成を見た時、最終的な形が決りました。それは、神のみことばご自身が人となることでした。(九二) 皆さん、常に祈り、敬意をもつて心と精神を神に捧げ、み言葉に聞き従つて下さい。(九二) 皆さんの上に豊かな祝福がありますように。(九二・九・十六)

説教・講話・書簡等の抄記

堅信 洗礼の恩寵の完成

教会シリーズ 14

1 「組織的に構成されている司祭的共同体の聖なる性格は、秘跡と徳行とを通して行動に移される」(教会憲章11番)と教える公会議のテキストに基づいて、今回は堅信の秘跡に焦点を合せ、教会についての考察を続けましょう。「堅信の秘跡によって、一層完全に教会に結びつけられ、聖霊の特別な力で強められて、キリストの眞の証人として、言葉と行いをもって信仰を広めかつ擁護するよう、一層強く義務づけられる。」(教会憲章11番)

2 堅信の秘跡が授けられていたという証拠は、早くも使徒行録に見られます。聖霊と知恵に満たされた七人のうちの一人、助祭フィリッポ(使徒フィリッポとは別人物)は使徒たちから司祭に任じられ、福音を述べ伝えるためにサマリアの町に下りました。「人々は心を一つにしてその宣教を聞いた。みなはその奇跡のうわさを聞きあるいは見ていたからである。」(…)神の国とイエズス・キリストの御名を述べ伝えるフィリッポの言葉を信じた男女は洗礼を受けた。(…)エルサレムにいた使徒たちは、サマリアが神のみ

ことばを受け入れたと聞き、ペトロとヨハネを送った。彼らはサマリアに下り、人々が聖霊を受けるようにと祈った。その人々は主イエズスの御名によって洗礼を受けていただけで、まだそのうちの一人にも聖霊は下っていないかった。二人が彼らに按手すると聖霊が下った。(使徒行録8:6-17)

この出来事が示すように、初代教会の頃から、洗礼と、聖霊の賜を受け、授ける秘跡すなわち按手とは深くつながり合っていました。この儀式によって洗礼が完成すると考えられます。それがとても大切なことであると思われたため、ペトロとヨハネが急いでエルサレムからサマリアに送られたのです。

3 聖霊の賜を授けるといふ使徒たちの役割は、ラテン式典礼の教会で司教たちに委ねられた最初の務めでした。ローマのヒッポリトの「使徒承伝」(二〇〇年頃)が伝える通り、この儀式は二世紀以来、按手によって行われてきました。二重の式が行われていたようです。洗礼の前に司祭によって塗油が行われ、洗礼の後に司教が受洗者に按手して、頭に聖香油を注いだのです。このように洗礼

の塗油と堅信の塗油とは別のものでした。しかし、キリスト教の長い歴史を経て、東方と西方では異なった様式がとられるようになりました。東方教会では、堅信は洗礼の直後に授けられます(洗礼式では塗油は行われませんが、西方教会では幼児の洗礼の場合、堅信は物事をわきまえる年齢、あるいは各国の司教協議会が決定する年齢に達してから授けられます。(新教会法典91条。「日本では、十歳から十五歳までの者に授けるのを原則とする。」「日本における教会法施行細則」14)

東方教会では、堅信の授与者は洗礼を授けた司祭です。一方、西方教会では、通常の授与者は司教ですが、司祭にも授ける権限が与えられます。さらに、東方では本質的な儀式は塗油だけですが、西方では按手とともに塗油が行われます。(新教会法典98条)

このように東西で異なっている上に、西方教会内でも、時代、場所、霊的文化的条件によって堅信を受けるのに適切であると考えられる年齢は異なります。秘跡を祝うのにふさわしい条件は教会に任されているのです。

4 堅信の秘跡の第一の効果は洗礼で受けた聖霊の賜を完成させることです。それによって、堅信の秘跡にあずかった人は、言葉と行いを通してキリストを証することができるようになります。洗礼は清めと罪からの解放、新

しい命をもたらすし、堅信は聖霊のもたらす聖化と力によって信者が眞のキリスト者として生き、効果的な証を立てることができるといふ積極的な面を強調しています。洗礼と同様、堅信の秘跡も特別の印章(霊印)を靈魂に刻みます。そして按手と塗油を通して、洗礼で受けた聖別が完成します。礼拝に参加する能力は、洗礼によってすでに授かっていますが、堅信によって一層強められ、共通の司祭職は深く根を張り、さらに効果的に実行に移せるようになります。堅信が与える印章の固有の働きとはキリストの証人として行動する力を与えることですが、それは聖ペトロが指摘するように共通の司祭職に端を発するものです。(Iペトロ2:9以下参照) 聖トマス・アクイナスは、堅信の秘跡を受けた者はキリストの名を宣言し、印章が与える「特別の力」によって信仰を広め、かつ守る良きキリスト信者として行動することができると説明しています。(「神学大全」II, q.72, a.5, 本文とB2)

これを可能にする特別の働きと権能が、堅信の秘跡によって与えられます。それはまさに「キリストの司祭職によって神の礼拝へ招かれたキリスト信者が、キリストの司祭職にあずかること」です。(前掲書 q.63, a.3) 公にキリストを証することは信者の果すべき共通の司祭職であり、「職務上」皆それに招かれていると言えます。(q.72, a.5, ad 2)

5 堅信の秘跡によって与えられる恩寵は、さらに具体的には強さの賜です。洗礼を受けた者は、堅信によって「聖霊の特別な力で強められる」(教会憲章11番)と公会議も教えています。この賜は、信仰と愛のための「霊的な戦い」に臨む(「神学大全」III, q.72, a.5)ため、誘惑を退けるため、キリストの言葉とわざを勇氣と情熱と忍耐をもって全世界に宣言するため、ますます熱意が必要となるにつれて、秘跡のうちに聖霊から与えられるものです。イエズスは、信仰を言い表すことを恥じるのは危険であると言われました。「私と私の言葉を恥じる者を、人の子もまた自分の栄光と御父と聖天使たちの栄光をもって来るとき恥じるだろう。」(ルカ9:26、マルコ8:38参照) キリストを恥じるとは、しばしば「人目や体面を気にして」自分の信仰を隠すことであり、キリストの眞の弟子となることを望む者にはとうてい受け入れられない妥協です。なんと多くのキリスト信者が今日もこの妥協を繰り返していることでしょうか。

聖霊は、堅信の秘跡を通して一人ひとりにキリストへの信仰を宣言する勇氣を与えてくださいます。冒頭に述べた公会議の教会憲章によれば、信仰を宣言するとは、忠実に交わらぬ証人として「言葉と行いで信仰を広めること」なのです。

6 中世以来、キリストのため

不変の教え

なく参与するとはどういうことかを考察してきた神学は、「神の兵士として仕える」よう召されたキリスト信者には、堅信によって力を与えられることを、ためらいなく強調してきました。そして「キリストの恩寵の充満」を源とする犠牲と聖化の価値をこの秘跡の中に認め続けています。(「神学大全」III, q72, a1, ad4) 堅信は洗礼とは区別されるべきであり、洗礼の後にあずかるものであること

(…) 神の御言葉への奉仕は、実に司牧者相互の絆から生じるものです。違わされたその場所、御言葉を言明するのは、司教の責務ではないでしょうか。皆さんは各地に派遣されました。従って、皆さんの任務は現代の歴史的・文化的状況の中にある人々に向かつて新たに福音を伝え、福音を通じて神のみことばである御方の、自由をもたらし力を示すことです。

福音宣教という使命の根本には、特に重大な要素となるものがあります。それは要理教育です。一九七七年のシノドスと、それに続く「要理教育に関する使徒的勧告」で取り上げたテーマです。

要理教育の内容は、福音宣教全体のそれと別なものではありません。(前掲書26番) 「要理教育は、回心に導いた最初の福音の知らせとは別なもので、その特徴は二重の目的を持っているところにある。すなわち心に生れた信仰を

とを、聖トマス・アクイナスは次のように説明しています。「堅信の秘跡は洗礼の秘跡のいわば最終的完成である。聖パウロが示すように、洗礼によってキリスト信者は霊的な建物(「Iコリント3:9参照」となり、霊的な手紙(「IIコリント3:2-3参照」となる。そして堅信によって建物は聖霊の神殿として聖別され、手紙は十字架の印で署名される。」(前掲書III, q72, a1))

成熟させるため、そしてイエズス・キリストの人格とその教えについてのより深く、より体系的な認識を通して、キリストの真の弟子を育成するためである。」(同19番)

信仰教育の大切さ

この「イエズス・キリストの人格と教えについてのより深く、体系的な認識」は今日の教会にとって、司牧上、無限の挑戦となっています。福音に仕える教会は、確かに平和のしもべ、疲れを知らぬ人権擁護者、真の開発推進者たら

7 知っての通り、堅信に関しては司牧上の問題、すなわち秘跡を受けるために適切な年齢の問題があります。最近では、秘跡の授与を十五、十八歳まで遅らせる傾向があります。それは、受ける者が成長していれば、キリスト信者にふさわしい生活を送り、キリストの真の証人となる責務をしっかりと認識できると考えた結果でしょう。また一方で、早く授けることを

んと努めています。最も大きな喜びとするところは、キリストの秘義の総体、人類を罪から贖い、御父との友情に導くため肉体とされた(ヨハネ1:14参照) 神のみことばを世にもたらすことです。「人はパンだけで生きるのではなく、(ルカ4:4) からです。

要理教育の重要性は、その第一の目的と関連しています。「単にキリストに接触するだけでなく、キリストとの交わり、深い親しみに入るところにある。キリストだけが私たちを聖霊において父の愛に導き、至聖三位一体の生活にあずからせることができます。」(「要理教育に関する使徒的勧告」5番)

キリスト信者には、生ける神の秘義をより深く知るために、要理教育が必要です。従って、要理教育は教会の聖なる義務であり、奪うことのできない権利です。司牧に携わる時は、全てに優先させるべきその重要性を認識していな

望む人たちもいます。いずれにしても秘跡にあずかるためには十分な準備が必要です。ふさわしい準備ができていれば、洗礼の約束を新たにし、与えられる賜と引き受ける義務を深く認識することができるとでしょう。周到に準備されていなければ、秘跡は単なる形式的で外面的な儀式に終ってしまい、道徳上の義務ばかりが強調されて秘跡の本質の意味を見失ってしまうことになるでしょう。

ればなりません。実に、一九七七年のシノドス教父たちの言葉に拠って、次のように言うことができま

「教会は地方的なものであれ、普遍的なものであれ、より人目を引きつける成果を上げ得る他の事業や企画に対して要理教育を優先させればささるほど、要理教育が、信者の共同体としての自分の内的生活と、宣教の共同体としての外的活動とを強化する手段であることを見出すであろう。」(同15番)

皆さん、最後になりましたが、司牧者たちにとって最も時機を得ていると思われることについて申し上げます。「カトリック教会のカテキズム」のことです。(※本紙九三年三月号参照。九二年六月に認可され、同年十一月、仏語、伊語、西語版が出た。現在他の訳を準備中。世界中からの意見を集めた上で、いづれラテン語規範版が出る予定。)それは神から教会への贈り物です。この要理書は、共同体の信仰を強めるため

堅信は、社会の中でキリストを証しようとする人々を励まし、助ける秘跡であることを心にためましよう。すべての若いキリスト信者が、堅信のもたらす恩寵を受けて、使徒聖ヨハネの言葉に備える者となることができようように。

「若者よ、私があなたたちに書き送ったのは、あなたがたが強い者であり、神のみことばをその中に保ち、そして悪者に勝つたからである。」(「Iヨハネ2:14」)

の素晴らしい道義となるでしょう。長期に渡り、熱心に世界中の司教方と協議を重ねた結果、いわばキリストが神の民にお教えになった内容の、権威ある要約とも呼べるものです。そこで、皆さんも、この要理書が「満ち満ちるキリストの背丈にまで至る」(「エフェソ4:13」)ため、それぞれの教区に提供するところの贈り物である、とお考えいただきたいのです。ペトロの後継者と共に、全司教団も現代の人々に、注意深く考えられたカトリック信仰の解説を提供するよう招かれています。こうして各地の社会・文化的状況、また要理教育を受けるさまざまな人々の状況を考慮した内容を与えることができます。新しい要理教育書を用いた福音宣教は、司祭、修道者、信徒たち自身の協力のもとに全ての司教が一致して携わることによって、はじめて可能になるのです。

(…) (ヨーロッパの司教に、九・十七)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料六百元 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393